

パネル・ディスカッション「戦後思想における全国唯研の歴史と現代の課題」報告

## 21世紀の唯物論のあり方について

佐藤 和夫 SATO, Kazuo

## I

唯物論研究協会が30年間続いたというのは、この目を回すような忙しい変動の社会のなかで、たしかに驚くべきことだし、しかも、若い世代の入会が着実に進んでいることも希望が持てる。私はそうした若い世代の入会の増加の理由には、大きく分ければ二つがあると思っている。一つは、既存の多くの学会がこの資本主義社会の原理的な問題点を正面から相手にして批判する雰囲気を使い、現実追隨的であるだけでなく、組織的にも、学問方法としても、著しく保守的であったり、権威主義的になっている現状に対して、唯物論研究協会が、いかなる留保も持たず、権威に依拠せず議論する場として機能してきたことが、この力になったと思う。このことは誇りにしていいし、今後ともその方向が強まっていくことを切に願う。

もう一つの活動の魅力は、現実する問題を学際的に議論するという方向が、学会が持ちがちな閉じた権威主義の危険性のある意味で突破する力を作りえたと言えよう。学問的権威を振りかざして、若い世代の意見表明や異論の可能性を排除してしまうことなく、現実の提起する問題を対等な立場で検討しあい、考えあうという思考の共同の可能性を開いた点では、それ以前の唯物論研究会がしばしば、激しい党派闘争的論争に陥りがちだったのと対照的に、研究会に自由な話し合いの可能性を引き出した。ただし、ここには、唯物論研究協会の創立に先立っての、全国若手哲学ゼミナール以来の伝統が活かされていると思われる。

以上のような積極的な側面にもかかわらず、現状の唯物論のあり方には、基本的な問題点があると私は考えている。それは、現代唯物論の成立が、とりわけて、マルクス以降、近代資本主義の批判を中軸においてきて、新たな文化をつくることの

重要さと意味が看過されがちであった点である。マルクスは、資本主義の文明化の作用を強調したが、そのことが、逆に、資本主義がほとんど完成した生産力を生み出した社会システムであるかのように位置付けられ、民衆が歴史の主人公として自覚的に新たな生活スタイルを作ることの重要さと意味が軽視されがちであった。(実際の社会主義の歴史を見ると、ソ連や中国で、当初、民衆の自発的な創造の試みが行われたことは事実だが、それは必然的に新たな矛盾を生み出すために、党や政府による上からの管理が容易になる計画性が重視されてしまった。)

そのために、結果的に、歴史のなかで現実存在してきた社会主義諸国の社会主義的経済運営システムは、資本主義的な問題点を時には一層増大する形で問題を引き起こしてきた。それは、資本家によって行われる経営を単に党が代行するだけであったり、資本主義復活への警戒のあまり、資本主義以上に上からの管理を強めるような形での経済運営となるが多かった。このような歴史的な失敗についてはもはや疑問の余地のないことのように思われる。たとえ、中国やベトナム、キューバといった国々で、経済的な成功があったとしても、それが今後の人類の希望を託すようなあり方でないことは明らかだろう。

なぜ、それが、人類の希望となり得ないかと言えば、少なくとも、経済的運営に関して言えば、それらの国々の方向が、日本のような資本主義的な「先進」地域にとってみれば、これからそちらへの方向を向かっていくような魅力に満ちたものとは映らないということがある。

そのもっとも大きな点は、民衆自身が歴史の新しい主人公として新たな社会を作り上げていく「創造者」として現れていないことにあるのでは

ないだろうか。かつて、社会主義国といわれる国々に暮らしてみても、一番、衝撃を受けたことは、これらの国々では、民衆が歴史と社会の主人公として創意に満ちた社会づくりをすることは実は一番忌避されており、党や政府が管理しているもの以外のすべての活動は、危険で望ましくないものとして位置付けられていた。

今日の中国などは一つの代表であろうが、民衆の自発性は、金儲けのための資本主義的な営みか、党が上から肯定する範囲の政治的活動に限られがちになる。

「活動」的側面の強調こそが現代唯物論の特質だというのがマルクスの強調点だとするならば、どうしてこれほど管理主義的な統治による民衆の自己運動の徹底的弾圧が「唯物論」の名前のもとに行われてきたのか。これは、現代唯物論の最大の矛盾である。

## II

マルクスは、人間の暮らし方、生活の仕方（「生産様式」とか「再生産」といった抽象的な言葉で語られたが）が人間を規定するというごくまっとうな主張をした唯物論者であったが、実際の研究においては急速に展開していった資本主義の経済構造の分析に大半の時間を費やした。資本主義の基本的な生産関係を定めるものが資本家と賃労働者の関係にあるというこれまたごくまっとうな主張と結びついて、この厳しい階級対立が、これまでの社会関係の中心的位置を占めたことはよく理解できることである。現にこの日本で、「先進国」等という名称も恥ずかしいような長時間労働が横行し、使い捨て部品のように扱われかねない非正規雇用者が増大していることなど、疑いもないほどの階級的対立の深刻化であって、今日、この問題の意味は減っていない。

しかしながら、今日の多面化した生活の中で、職場の雇用形態だけが主要な問題だというのなら、マルクス自身の唯物論の原則にももとるであろう。私たちの今日の生活はきわめて多面化しており多次元化している。たとえば、働くというた

った一つのことにしても、今日、見逃されがちな重大な問題は、（とりわけて男性において）労働のほとんどの問題が賃労働の問題に還元されてしまっているという事態がある。

きわめて奇妙なことであるが、日本の都市生活者の生活はひどくいびつな構造になっている。都会に働く労働者の大半の生活は、企業に取り込まれてしまっており、それ以外の時間が極度に内容を失っている。驚くべきほどの科学技術の進歩は、もっぱら、企業の生産効率の上昇に使われており、働く庶民の生活は、一定の収入の代償のように長時間労働のままである。その結果、それ以外の生活は、労働の疲労を忘れるための休養と気晴らしのための消費主義的な時間になってしまっている。市民自身が街を作り上げながら、人と人のつながりを楽しめるような条件が奪われ、家庭生活でも家族とさえ十分な時間が取れないのが実情である。したがって、生活の内容は一方では、マルクスの時代の労働者の生活にも等しいような抽象的なものになっている。

とはいえ、他方では、このような生活の抽象性に対抗する新たな生活の創造、暮らしを新しく創り「始める」ことは、生活のさまざまな点で始まっている。とりわけて、男性たちが企業社会に取り込まれてしまっているなかで、女性たちのなかには、「夫は仕事、妻は家庭」といった固定的性別役割分業を逆手に取るような新たな生活上の工夫をする人々も少なくない。女性たちは、性別役割分業の固定化による男性、女性双方の生活の貧困化、抽象化に対抗するかのようになり、これまでの家庭生活と仕事の矛盾、家族関係の破綻を前にして新たな試みを多面的にしている。その一番消極的で断固たる形態が、急速な未婚化社会の到来であり、積極的な形態としては、ヨーロッパでは、フランスの PACS に代表されるようにこれまでの結婚の形態を超える男女や家族の形態の急速な形成である。また、これまでの閉鎖的な家族関係を越えようとしてコレクティブ・ハウスやルーム・シェアリングなどの共同生活の新たな形態が全国的に多様に試みられている。このようなカップル関

係や家族形態の新たな形成こそはマルクスのいう暮らし方や生活の形態の中核をなすものである。

今日、極度に孤立化された閉鎖的な「核家族」形態以外の新たな形が見えにくいことが、子育てや介護、さらには夫婦関係に多くの困難をもたらしている。そうしたなかで、どのような新たな「暮らし方」、「生活の仕方」を形成するかということは、まさしく「唯物論」の根本的な課題である。そのような根本的な課題が唯物論の問題の根底に据えられなかったのは、これまで「暮らし方」や「生活の仕方」の問題が、資本・賃労働の問題に還元されてきたからに他ならない。さらに言えば、生活の変革が、権力の奪取による上からの改革を考えていて、一人ひとりが新たな人間の関係や地域を自分の頭で工夫してどのように作るかという工夫に結びついていなかったということがある。

同じく、重要な問題に街づくりがある。戦後の革新自治体の貴重な経験があるものの、それらが本質的には自治体行政の連関において作られてきたものが基本であった。しかし、自治体の財政困難とも係わって、街の生活を作るのは、その住民自身であるという当たり前の事実が、今日新しい様相を作りつつある。NPO 活動として、今、多様に取り組まれている営みのなかには、たとえば、ワンデイシェフの試みのように、地域のあり方を根底から変えていくようなさまざまな試みがある。ワンデイシェフというのは、地域の一定の施設を利用して、地域の主婦を初めとする料理を得意とする人々が、自分の得意な料理を自分の工夫で値段付けをして食事を地域に提供し、それを全体で地域づくりの新たな協力の仕方として作ろうとする試みである。地域には、料理が得意だが、それを地域の人々に披瀝して、一定の収入にもなるような協力の仕方がこれまで存在しなかった。それを1週間に1回とか、一ヶ月に2回といった具合でレストランを任せられ、料理の種類も値段も工夫を凝らしながら、地域の交流の場ともなるような試みをするというのは、これまでの利益を自己目的にする企業経営とも、無料を前提とするボランティア的な街づくりともまるで違う次元の試み

である。これこそ、新たな暮らし方「生活様式」の形成に他ならない。

私が、このような試みに注目するのは、今日の動脈硬化を起こしたこれまでの生活様式に風穴を開け、そこから新たな人間の結びつきと生活の様式を「始めて」いるように感じるからだ。「実践的」唯物論は、生活を新たに始めることにその真髓があるのではないのか。

### III

現代世界を特徴づけるもう一つの深刻な課題に多忙化の問題がある。人々は、生活の効率化のために極限的に生活を合理的に組織され、いつも忙しい生活感覚から自由になれない。

こうした状況について、団塊世代を中心として、現代社会に積極的な役割を果たしている人々の大半は、無抵抗なほどに受容的である。それは、何よりも、この忙しさが、人間という存在に抜きがたくこびりついている無用感を克服させ、自分が役に立っているという幻想を与えられるからである。たしかに役に立ってはいるのだが、それは、根底的には、利潤増大のために働かされる有用感に過ぎず、現実にはその忙しさは人間関係を豊かにするためではなく、身近な人間関係を犠牲にして働くことに没頭するという転倒的な事態を引き起こしている。にもかかわらず、中高年以上の世代のなかに、労働時間の短縮が第一の要求となっていないことは、労働組合の要求を見れば明らかなことである。

けれども、若い世代のなかには、このような有用感のために犠牲になる生活構造への根本的な疑問が生まれており、抵抗感が爆発直前のマグマのように噴出してきている。いうまでもないが、そのもっとも挑発的な形態は、ニートといわれるような集団であり、自ら積極的に(長時間労働を予測して)正規雇用を選ばないといういわゆる「フリーター」のような集団の存在である。

他方で、まったく新たな形での、自由の創造の形態も現れつつある。それは「有用性」という近代の基本原理への根本的挑戦である。「何のため

に」役立つのかという有用性実現の手段としてのみ人間の生活を考えるという構造に対立して、それ自身で人間の根源的要求であるものとしての「思考」への要求などはその代表であろう。巷に流れるある種の哲学の流行がきわめて安易なハウツー的な解決への依存であるとはいえ、考えることへの要求は確実に増大している。

それは一種の哲学的な要求としても現れているが、より根本的には、遍路や座禅のようにいわば「観想的生活」(vita contemplativa) への要求としても現れている。若い世代は、なにか超越的な存在への帰依のための瞑想や思考を求めているというよりは、瞑想や思考それ自体への要求を強くもっており、その意味で伝統的宗教願望とは一線を画す面が生まれつつある。さらに、それは、もっと実践的形態としては、踊りや祭りへの要求の増大としても現れている。これらは、高度経済成長の時代に代表される経済成長第一主義の時代には、共同性そのものへの要求としてではなく、商店街活性化といった経済的な動機や、男女交際の実現の手段として性的な動機として位置付けられるようなものであった。しかし、今日の若い世代のなかに生まれつつあるものは、むしろ、そうした物質的利害の手段としてではなく、自己目的としての共同での人々のコミュニケーションの可能性である。それはアーレントが「活動」(action) と名付けたような活動の領域であるが、従来のアーレント研究をした政治学者たちは、この活動の領域を、現実の経済利害の争いの場となってしまうほどの政党制度や議会制度と混同するほどであった。

若い世代が求めているのは、コミュニティ・カフェとか「哲学カフェ」といった形で、利害を超越した対等平等なコミュニケーションの空間を求める新たな試みである。

#### IV

唯物論研究協会は、おそらくこのように陸続として現れつつある人間生活の新たな暮らし方の創造に大胆に対応すべきではないだろうか。それは文字通り、マルクスが指摘した暮らし方の自覚的

形成という唯物論の中心課題であろう。近代社会が、資本主義の経済的發展に生活と暮らし方を一面化し貧困化されてきた時代だとすれば、21世紀の現代社会は、経済的生活を生活全体のなかに組み込み直す時代なのではないだろうか。経済が他のあらゆる人間的活動を手段化する時代から、多面的な人間の暮らし方が経済の支配を脱し、それ自体の人間的輝きをどう取り戻す時代になるのかというのが、成熟から腐敗へと転化しつつある現代の根本課題であろう。

21世紀の唯物論は、その意味で、思考や精神がすべて経済や物質的利害の手段に成り下がった時代から、人間の多面的な生活が復活し、人間同士のコミュニケーションが、それ独自の意味を社会的に復活される時代に必要なる思想とならねばならないだろう。その時、唯物論は、精神や文化が、物質的利害の付属物や付随現象ではなく、現実を構成する不可欠な力となるための思想であろう。その意味で、人間の精神が持つ創造的精神の積極的担い手として、唯物論は新たな形態へと移る必要があると思う。